

ごあいさつ

— 世の中すべて、喜劇で終わる —

みなさま、こんにちは。お元気のこととぞんじます。また、お元気じゃないと困ります。世の中、色々なことがあって、なかなか心も身体も落ち着きません。オペラどころではありません。でも、ここはドンと落ち着いて、オペラでも観ながら、世の中の行く末を考えるのに良い機会です。

オペラは、音楽とお芝居が一つになったものです。舞台の上で語られるのは、歌であり、台詞です。お芝居は、「ある性格を持った人間がその時起きた事件に対してどのような態度や行動をとるか」を描くものです。すなわち、お芝居とは、登場人物の性格と事件との関係の「発表・陳述」でしかありません。それを、感情を込めて、さも、真実のように歌ってみせるのがオペラです。



この「お芝居の人間と事件」の関係には、密接で複雑なものがあります。特に人間は、「性格にあった事件にしか出遭わない」（小林秀雄）のであり、人人の性格は事件を、「自分の倫理感や宗教や能力にあったように自由勝手に解釈する」のですから、それぞれの人物の個性によって、それぞれの事件の真相や顛末(てんまつ)は、百花繚乱、色々さまざまに現れます。オペラによって、世の中の行く末を考えることは出来ても、結論や行動規範になることはありません。でも、それは、政治家でも、科学者でも、社会学者でも、生物学者でも、同じことです。彼らの主張は、総じて、「未完成の悲劇」で終わっています。現実には負けたのです。

この世におけるオペラの役割は、観る人が、舞台の上の当事者になって、同じように考え、共感し、反発し、行動し、失敗し、成功してみせる場を提供することです。そして、自分の性格を試し、覚悟を決めるのです。

「お芝居には悲劇はない」というのが、私の持論です。世に言う「悲劇」とは、「10分前で終わった喜劇」のことをいいます。あと、10分すれば、どんな悲劇でも、喜劇として終わるのです。シェイクスピアの四大悲劇も、「ロメオとジュリエット」の悲劇も、モーツァルトの歌劇《ドン・ジョヴァンニ》も、最後はハッピー・エンディングで終わる喜劇です。我慢強く、心優しい観客は、すべて救われるのです。これが、この世におけるオペラの役割です。

それで、このホームページを立ち上げ、オペラにまつわる、なかにはオペラとはあまり関係のないものもふくめて、数々の「エッセイ」を載せることにしました。

どれも、このご時世、「世の中すべて喜劇で終わる」というお話のつもりでお読みください。